

新年度を迎えるにあたり「陽はまた昇る」

一般社団法人 日本オーディオ協会

会長 校條 亮治

新年度を迎えるにあたり、この一年を振り返り少し所感を述べさせていただきます

■ 「決意！」：2014年ジャーナル5月号より

昨年ジャーナル5月号において、「日本人は過去を振り返らない、若しくは考えない体質が今日を招いている。国内オーディオ業界の低迷を考えるに際し、過去とも正面から向き合い、真の業界発展に向けた議論が沸き、具体的行動になることを願う。特に『ハイレゾは救世主に成りうるか』のテーマで『ハイレゾ・オーディオ』の動きについてその本質を捉え、国内オーディオ業界の発展に寄与すべく起爆剤になるよう、協会として冷静なリード役を担う。」と宣言しました。

■ 「自己変革！」：2014年総会挨拶より

さらに昨年総会の冒頭挨拶では、「地球という自然環境がおおきく変貌しているような気がする。そして、世界の動向及び経済活動について三つの重要な視点がある。」と申し上げました。第一は「世界は大きく変わろうとしている、若しくは変わったのに、日本は変わらない、若しくは変わろうとしていない」こと。第二は「世界は連鎖になっており、日本だけが個別では有り得ない」こと。第三に「新しいモデルが必要になってきている」ことを指摘し国内オーディオ業界、日本オーディオ協会活動に対して、自らへの警鐘と反省に基づき、「次世代オーディオ」として「ハイレゾ・オーディオ」の導入を提案しました。

その後の状況は、皆さまが良くご存じのとおり「ハイレゾ・オーディオ」は6月12日のプレスリリースを皮切りに「日本発、世界初」の情報発信となり、米国CEAとも「パートナー契約」を締結し、今や世界のスタンダードになろうとしています。

■ 「明確にされた戦略！」2015年年頭所感より

そして今年の年頭所感では「イノベーションが新市場を創る」というテーマで「ハイレゾ・オーディオ」の提案こそが、“次世代オーディオ市場創造”に向けた「戦略」的見地により組み立てられていることを明らかにしました。ここで今一度、戦略について述べておきたいと思います。

私達がここ数年間、追い求めてきたことは、「新生日本オーディオ協会」による健全なオーディオ市場を構築するために、「日本オーディオ協会設立理念」の確認と「新ビジョンの制定」、「新定款設置」と共に「公益法人」から「一般社団法人化」への事業体変更の取り組み、そしてポートフォリオ分析による「四つの融合化」に向けた活動であったと言えます。重要な考え方ですので以下に再度明示し、皆さまと確認したいと考えます。

<定款前文>

この定款は、1952年に日本オーディオ協会が設立された趣旨である、“可聴音・高忠実度録音、及び再生の飽くなき追及”を行うために活動の基本を定めたものである。

<ビジョン>

私達は再生音楽即ち、豊かなオーディオ文化を広め、楽しさと人間性に溢れた社会を創造する。

<活動のスタンス“四つの融合”>

- (1) プロの匠とマニアのこだわり、そしてビギナーの憧れの融合
- (2) モバイルオーディオとホームオーディオの融合
- (3) 2Chオーディオとサラウンドサウンドの融合
- (4) デジタル技術とアナログ技術の融合

以上の考え方にに基づき、単年度毎に具体的な取り組みを事業計画で明らかにしてきました。また、この間変革のための環境整備として「中期組織・財政検討会議」を設置し、「中期組織・財政検討会議答申書」の発行により、飛躍に向けた事業取り組みへの落とし込みを進めてきました。特に今次の「ハイレゾ・オーディオ」提案は、ビジョン達成と四つの融合に向けた具体的施策であると考えます。

■ 「機は熟した！」

今次の戦略提案の第一は“オーディオ新市場構築”を視野に入れ、「次世代オーディオ」としての「ハイレゾ・オーディオ」を提起していることです。従来のHi-Fiポジションをハイレゾポジションにポジション変更をすることにより“新市場創造”を計ろうとするものです。このことによりオーディオ業界が従来とは違う「業際領域」に踏み込むことになる可能性があります。

具体的にはスマートホンやパソコン等IT業界やデバイス、配信など川上に及ぶ可能性もあります。違和感をお持ちの方々も多いかと思いますが、世界の多くの人々がスマートホンや携帯音楽プレーヤーで音楽を聴いている現実を認識し、これらの市場に積極的に関わることが、多くの人々に「質の高いオーディオ文化」を届けることになることを確信して進まなければ後手を踏んでしまいます。当然、プレーヤーである既存会員企業には、新規参入企業や新規カテゴリーの出現による負荷がかかることは予想されます。しかし恐れることなく逆に“大きなチャンス”と捉え挑戦して頂きたいと考えています。

第二は、「ハイレゾ・オーディオ」を提案したことにより、普遍的課題である「良い音とは何か」を炙り出していることです。私たちは「ハイレゾ・オーディオ」自体が絶対的に「音が良い」とは言えないことを明言しています。「ハイレゾ・オーディオ」は「良い音」に向けた環境整備をしているに過ぎません。この様に、これまで明確化を避けてきたことに正面から取り組むこととなります。これはアナログ技術等既存技術の磨き上げは勿論、日本オーディオ協会設立趣旨の達成に向けた取り組みであり、デジタル・アナログを問わず、全ての会員企業の課題でもあります。

第三は、「産業政策の転換」です。電機業界及びオーディオ業界は長らく「量の追求」を追いか

けてきました。それはデジタル化によるコモディティー化と、コストダウンによる価格訴求、及び機能競争にのみ資源、資本が費やされてきました。再生音楽とはいえオーディオは文化です。当然、そこには質の追求があつてしかるべきです。私たちはデジタル技術を受け容れ、デジタル技術とアナログ技術の融合を図り、その進化を止めることなく、「量から質への転換」を計らなければなりません。

■ 「陽はまた昇る！」

以上の基本戦略に基づき、今期の事業計画を組立えています。特に具体的活動を推進するに際し新規会員の皆様も多く参加されようとしています。新しい活動組織も配置しました。新たな会員の皆さまと、新たな考え方をオーディオの本質を外れることなく積極的に迎え入れたいと考えます。今次の戦略を「千歳一遇のチャンス」と捉えるか、「邪道」と捉えるかは会員の皆様方の考え方にかかっています。執行側としては「背水の陣」で臨む覚悟です。「日本発、世界初」として私たちがアドバンテージを取って「陽はまた昇る！」ことを実現したいと考えます。皆様方の広範且つ建設的な議論が沸騰することを期待しています。

注：「陽はまた昇る」はビル・エモットの著した著書名

ロンドン出身。オックスフォード大学モードリン・カレッジ卒。1980年エコノミストに入社。ベルギーのブリュッセル、ロンドンで記者を務めた後、1983年から3年間東京支局長（日本・韓国担当）。1993年に同誌編集長。2006年3月まで13年間務めた後は編集者を引退し、国際ジャーナリストとして活動中。

1990年の著書『日はまた沈む』は、日本のバブル崩壊を予測し、ベストセラーとなった。また2006年の『日はまた昇る』では、日本経済の復活を予測した。